

佳作

未来のわたしへ

東京都 創価高等学校一年 長島 百合杏

未来の私は今、この作文を読んで何を思っていますか？未来の私は夢に向かって頑張っていますか？負けない心をもっていますか？家族は皆、健康で元気でしょうか？あの時の辛く寂しかったこと、思い出したくなかったこと。正直今もまだ辛いけど、思い出せることを忘れないように、記録として残しておきたいと思っています。

五年前の二〇一三年六月の終わりに、優しく大好きな祖母に癌が見つかりました。その祖母の頑張りには私に大切なものを教えてくれました。「負けないことが勝つことだよ」祖母が私にいつも言う言葉です。それを祖母は体を張って教えてくれました。

あの日「おかえりなさい」。いつもと変わらない、祖母の優しい笑顔があった。でもいつもとは違う場所。二〇一三年六月の終わりに祖母は母と病院に行った。その年の初め頃から体調が悪いと言っていた祖母。病院には通っていた。でも良くならない。だから大きな病院でみてもらうことになった。病院に行く日の朝、いつもと

同じく優しく見送ってくれる祖母に私は心の中で「絶対に大丈夫。おばあちゃんは大丈夫」と言い聞かせながら、学校に行ったことを今でも鮮明に憶えている。祈る思いでその日を過ごし、学校から帰った。

「おばあちゃんは食道癌だった。今日から入院。みんなでおばあちゃんのために頑張ろう。」

母の声が震えていた。何事にも一生懸命に頑張ってきた祖母。一緒に住んでいた曾祖母が認知症になって大変な毎日になってしまっても、何も言わずに頑張ってきた祖母の姿に私は「努力」そして「忍耐」の心を教えてもらったと思う。当たり前な日常が当たり前でない日々。当たり前前な健康が当たり前ではないこと。全てに感謝をしながら過ごさないといけないと心から感じた。

祖母の抗がん剤治療が始まった。抗がん剤の副作用は、私が思っている以上に、すさまじかった。でも祖母は負けない。どんなに辛くても決して弱音を吐かない。今度は祖母から「負けない強さ」を教えてもらった。祖母がいつも「負けないことが勝つことだよ」と言っていた言葉が心から分かるようになった。おばあちゃんは病気に負けない。癌なんかには負けない。そう信じていた。その年の九月に行われた手術は大成。後は再発、転移をしないことを祈るのみだった。なのに。翌年の二月、肝臓に転移が見つかった。またもや、辛い抗がん剤治療が始まった。

しかし、今度は無情にも抗がん剤は効かなかった。医者から、これからは好きなことをしてくださいと言われた。何それ、医者なら治してよ！それが仕事じゃないの？あの時の私の心は怒りでいっぱいだった。でも、祖母の顔はいつもと変わらない優しい顔をしていた。祖母の体はどんどん細くなり、本当に棒のようになっていった。でも、何事にも負けないスーパーおばあちゃんは、決して弱音を吐かず、いつも通り、一日一日を大切に過ごした。後から母から聞いた祖母の言葉。それは「百合杏ちゃんの成人式まで生きたい」。母は「見れるに決まっているよ。それ以上生きるんだよ」と言ったらしい。そうだよ。おばあちゃん。私の結婚式だって出てくれなくちゃ。それなのに。

その年の十月十日午後十二時四十三分。祖母は、祖父、母、兄に見守られながら、大空高く旅立っていった。その時、息が止まる祖母に、母が「息をするんだよ！そうしないと死んじゃうんだよ！」と言ったら、祖母は息を吹き返したという。でも三回目は長く息を吐いたらしい。それはおばあちゃんの体から魂が出て行った瞬間だったと、母は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、話してくれた。祖母との思い出は尽きないほどある。私の誕生を誰よりも心待ちにしてくれていたおばあちゃんだったから。ただあの時、しばらくは本当に何も考えられなかった。夢であればいいと毎日思っ

ていた。母も毎日毎日泣いていた。その姿を見るのも辛かった。ある時、兄が言った。

「お母さん、泣いていたらだめだよ。そんな姿はおばあちゃんには喜ばないよ。」

と。あれから、母は私達の前では泣かなくなった。でも、見えない所で泣いていると思う。きっと今でも。それぐらい祖母は家族の中で大切なかけがえのない存在だったから。この間、母の携帯を見てしまった。そこには、私と同じく祖母の闘病日記がメモに書かれていた。最後にこう書いてあった。「もう少しだけ、本当にもう少しだけ、泣かせてください。そうしたら私はママのように子供たちを立派な親にしてみせるよ。そして可愛いおばあちゃんになるからね。孫から自慢してもらえていたママのように」。

大好きなおばあちゃん、絶対に忘れないよ。おばあちゃんの何事にも負けない心を繋いでいくからね。そう未来の私の子供にも！自分のためでなく、いつも人のために頑張ってきたおばあちゃん。安心して空から見守っていてね。十二年間、本当にありがとうごさいます。